

本多 虔夫・重野 幸次 著

脳卒中・神経筋疾患のマネージメント QOL 向上のために

(B 5 216 頁 3,708 円 (税込) 1989 年 医学書院 刊)

山崎 京子

(横浜市衛生局保健部)

脳卒中、筋疾患は、いずれも神経、筋肉を侵すもので、その症状には共通のことが多い。しかも手足の麻痺、失語など日常生活に大きな支障をきたす。このような病気への相談に応ずる時、「今、この人に何をなすべきか」を判断するのに戸惑いを感じることもある。

それは、その人の一生を見通すような長期算にわたるビジョンをもって、急性期の治療から慢性期の生活まで、その病期に必要な安全で確かな、しかも実行可能な具体的な援助が求められるからである。その内容も、患者への医療的援助だけでなく、「できるだけ自分のことは自分でやるという自助行動を達成する方向」を持ちながら、できない部分を家族が補い、家族で補えない部分を専門職や諸制度の活用などによる社会的援助で補う、というように、病気そのものを深く理解していると同時に、患者の病状や家族の介護力を見極めながらさまざまな変化をつかみ、それに対応した援助をすることが大事で、一面的、即事的な判断だけでは「見極め」が困難であるからである。

本書は、神経内科で長く診療に当たられた著者らが、このような疾患を持つ方々の苦しみ、迷い、闘い等を理解され、愛情を持って書かれていることがサブタイトル“QOL の向上のために”からも察知できる。また、長期間にわたって治療や援助に当たる医師、セラピスト、保健婦、看護婦等さまざまな専門職が援助過程で確かめた事柄を見通した手引書となっている。これに加えて、これらの専門職が他の職種のこととも十分理解して互いに協力することが“QOL の向上”につながるということを指摘し、医療従事者間の信頼と協力による援助活動への熱い思いが伝わってくる。

本書の内容は疾患や症状からのマネージメント、リハビリテーション、在宅療養とその要点、社会的援助という5つの観点から構成されている。病気そのものの理解にはじまり、経過中に生じやすい変化のとりえ方と、それへの対応等について言及、運動麻痺、呼吸障害、失語など起こりやすい症状を挙げ、発症の仕組み、観察の仕方、治療や訓練との関連など、

症状からのマネージメントについて述べている。

リハビリテーションについては、その定義や運動療法、理学療法、言語療法、装具と自助具、作業療法と日常生活動作訓練などリハビリテーションの実践を写真や図を数多く挿入し詳述している。次いで、慢性疾患もできるだけ入院を避け、自宅で療養することを促される時代になったが、障害を持つ患者にとって必ずしも容易なことではない。家庭での受け入れなど在宅療養とその要点を述べ、最後に社会的援助、社会資源の活用について書かれている。

また、Q & A の形で「筋萎縮性側索硬化症をどう告げるか」、「リハビリテーションに熱意を示さない患者への対応は？」など、訪問看護や実際に現場で直面する事例に役立つ専門的なアドバイスがコンパクトに示されており、理解しやすく、患者や家族への援助、指導に活用できるよう配慮されている。

このように著者らの人柄と他者への思いやりが感じられ、病院での対応だけでなく、生涯積極的な生活が続けられるように“QOL の向上をめざす”援助がますます重要になっている現在、本書は医師やセラピスト、保健婦、看護婦など保健医療関係者にとって絶好の参考書となるであろう。